

雜報三件

X Y Z

米國々立理學院の天文講演

去る四月二十二日から同二十五日まで、ワシントン府の博物館内に於いて、國立理學院 (National Academy of Science) の通常年會が催され、當所のフロスト臺長も夫人同道で之れに出張された。四日間、事務會と公開講演會とが交互に開かれ、ひろく、一般の理學上にわたつて、幾多の重要な發表があつた。中について、天文學に關したものとせば、

二十三日午後八時 (國立博物館大講堂に於いて)

W. W. カンベル氏 (カリフォルニア大學總長兼リク天文臺長)

「コロカール日食遠征觀測の結果の要領」

さいふ大講演があり、同氏はアインシュタイン理論の證明については之れ以上の觀測は不必要であるほど完全な事實を握つたと報告し、列席のラツセル氏 (プリンストン天文臺長) は此の結果は口を極めて賞賛した。カンベル氏は尙、其の節に觀測した太陽コロナの狀況を報告し、今日までは太陽の磁極が自轉軸より六七度傾斜してゐるさ多くの學者に考へられてゐなければ、昨年の觀測から見れば、右の兩軸の傾斜は僅か一度を用ない。之れにより、今までの太陽學は少々變更を要するを述べた。コロナは全體として發達不充分で、殊に分光學的に波長五三〇三のコロナ光線は微弱であつたが、寫眞によつて、コロナは其の組織を明らかに表はしてゐるやうである。翌二十四日午後一時半から、又、主として天文學上の論文が公表せられた。其の項目は

H. N. ラツセル氏 (プリンストン天文臺長)

「二重星の運動の研究」

H. D. カーチス氏 (アレゲニー天文臺長)

「分光連星の軌道曲線の不規則性」

S. A. ミチエル氏 (マツコルミク天文臺長)

「マツコルミクの二十六吋望遠鏡で撮影した寫眞による三百五十星の視差」

C. P. オリウイアー氏 (エール大學天文臺)

「エールの流星寫眞の結果」

H. N. ラツセル氏 (前出)

「太陽表面の壓力」

同日午後三時から更に天文學と物理學との聯合講演會が開かれ、其の席で

C. G. アボット氏 (スミソニアン天體物理天文臺長)

「異常冬の太陽前奏樂」

さいふ、表題から面白そうな研究が發表された。之れによると、昨年まで二三年の間、太陽の發射する熱量は非常に多く、それが一九二二年に至つて、五十年來未嘗有のレコードを示した、しかるに、同年末に至つて俄然として熱量が下降し、遂には下降前の三乃四パーセントも減少してやつた。これが前提となつて、世界一般に異常な嚴寒の冬が襲來し、従つて春の明ける時期も今年程遅れたことは未だかつて無かつたところであるといふ。スミソニアン天文臺は目下アリゾナ州のハークワ山上、海拔五八〇〇呎の所に太陽觀測所を設けて毎日連續觀測をつづけ、之れと同時に、南米チリのモンテツ山上、海拔九五〇〇呎の所にも出張所を置いて、アリゾナの方と協同觀測をやつてゐる。今回の太陽異常性を解決するためには、一九二五年七月までは、右の二ヶ所の連續觀測をつづける筈であるといふ。(一九二三、五、一。ヤークニス天文臺にて山本)

北冠座 R

一九二二年十二月以來此の不規則變光星 (一五四四二八) は六・〇—七・〇等の殆ど極大光度を維持し居たり。然るに四月ハアウアド天文臺着のナクスの W. F. H. ウォーターフィールド氏、ピッツバリアの C. V. マクアチーヤ氏の報道に其に該變光星の光輝は本年四月上旬より降下し始めたることを示せり。(本會發行的天文急報第七號(四月廿七日)以下に度々報告せり) ハアウアド天文臺に於て本年五月七日なされたる觀測に由れば一〇・一等なりき。四月中には變化は徐々たりしも其後迅速に降下しつゝあり。それは一九一七年九月一三・六等に降下せし以來層で眼視光度一〇・〇等以下に降りし事なきなり。

三月廿一日以來二十五名の觀測者により百回の觀測がなされた。同星は正確に四月一日から減光し始めたも初めは極く徐々たる降下を示めしなり。五月九日には其の減光は一光度の四萬四千分の一に當る日常極小値に達したり。五月十四日には極小光度一〇・八六等に達したり。其後該星は増光し始め五月二十三日には一〇・八一に達せり。それ以來再び輝き光度に於て増大し、五月二十九日一〇・八等に達したり。而して今や始て極大光度に復せり。因に中村氏及東京天文臺の神田氏の觀測は次の如し。

月	日	光度	月	日	光度
三月	二七日	六・〇	五月	九日	一一・〇
	二七日	六・四		一〇日	一一・二
四月	二二日	六・五		一八日	一一・六
	一六日	六・三		廿五日	一一・二
	二九日	七・五	六月	二二日	一〇・六
	一日	七・七		二九日	八・五
五月	四日	八・五	七月	三日	七・五
	八日	一〇・六		二九日	六・六
			八月	一八日	六・二

疑はれたる天體の第一表

ハアブアド寫眞の組織的試驗に際して、一箇の明白に純な像が発見され而もそれ以前又以後に於ける感光板に確められざるものあり。然れど比較板は其の像を示めず所の板より日、週又は月により分離され得べし。少くも是等の或物は多分顯著に位置し光度に於て變化せる天體の像なるべし。ミス・ウツツがメトカーフ一六時望遠鏡にて感光板上に記されしもの、二三の位置に近似光度を次に掲ぐべし。

赤緯一八時四八・〇分、赤緯北三五度三七分にある天體は二日後に撮りたる寫眞には現はれ居らず、同寫眞は該天體より三光度弱き諸星を示めせり。該天體は銀河に近き翠座中にあり彼處は微光なる新星の出現すべき所なり。次表中の第一及び第三の天體は小遊星(六七五)ルドミラ及び(四七二)ローマの位置に近く、相當せる日附にありたり。

日 赤經(八五年) 赤緯(八五年) 近似光度 天體

日	赤經(八五年)	赤緯(八五年)	近似光度	天體
一九三三年八月六日	〇	五・三	北三	變光星
一九三三年三月六日	一	九・九	北三	小遊星
一九三三年九月六日	一	三・三	北三	小遊星
一九三三年九月六日	二	三・三	北三	小遊星
一九三三年九月六日	三	三・四	北三	變光星
一九三三年五月六日	三	三・〇	北三	變光星
一九三三年六月三日	七	三・三	北三	小遊星
一九三三年七月七日	八	三・〇	北三	新遊星或新星
			北三	新遊星

一九二五年の其位置赤經一四時四二分、赤緯北二四度二七分なるよく定義したる變光星體がメトカーフ一六時望遠鏡で撮影されたる一九一九年二月及び一九二三年の五月及七月に於ける寫眞中に現はれ居れり、されど該機並に他の望遠鏡でとられしそれより前後の感光板中には現れ居らず。此の天體即ち既知變光銀河系星雲に似る此の物體の實在性は未だ肯定も否定もせられず、唯其銀河系高緯度及び大光度變化はそれをして値をならしむるなり。數箇の天文臺は該方面の觀測を依頼せられたり。而して近時ヤークス、ローエル及びウイリソン天文臺より報道せられし觀測は疑問の天體に關して何等他の痕跡なきを示す最近のハアブアド寫眞を裏書せり。博士ハツプルが一〇〇時反射鏡を以て長時間露光して撮影せし寫眞は上掲の位置の半度の以内、一百以上の星雲狀物體の存在を示めせり。されど明かにその何れも銀河型に屬せず。

唯一枚の寫眞に現はれたる天體の外に、偶には一星、さなくば不變の光度の天體が唯一の著しき光或は減光を示めせり。そは疑ひもなく或は眞實のものなるべく或は重なりたる認め得ざる寫眞の缺點に由るものなるべし。

恆星、彗星、星雲、小遊星及流星の像に類似するあらゆる寫眞の缺點は勿論直ちに認識し得べし。或る理由の下に彼等(きつ)は屢々現はるものなれども、形態及び組織の特徴よりして彼等が偽の性質のものなる事を容易に識別し得るなり。

(前項と共にハアブアド・プレテンより)